Osaka University Knowledge Archive

Title	ユーフレイズ・ケジラハビの作家研究
Author(s)	小野田, 風子
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72343
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　小野田　風子　　）	
論文題名	ユーフレイズ・ケジラハビの作家研究

論文内容の要旨

本論文では、スワヒリ語文学の代表的な作家であるタンザニア人のユーフレイズ・ケジラハビ（Euphrase Kezilahabi, 1944-）の作家像を探求した。第一部では、彼の経歴や彼についての先行研究、小説と戯曲、彼の博士論文のあらすじなど、議論の前提となる基礎的情報を4つの章を用いて確認した。

ケジラハビの作品研究と作家研究に取り組んだ第二部では、作家と作品の特性を包括的に捉えるために、主に作品の内在分析に集中する章と、外在要因と作品との関係性から作家像を考察する章とに二分した。作品の内在分析を行う第5章は「スワヒリ語文学における変革者としてのケジラハビ」と題し、スワヒリ語文学の伝統や既存の文学形式に従わず、斬新で実験的な技法や形式を積極的に用いるというケジラハビの側面に着目した。スワヒリ語文学界では、ケジラハビはスワヒリ語による自由詩と実験的小説という新しいジャンルを確立させた人物として主に認知されている。よって本章では、それぞれのジャンルについて一つずつ節を設け、彼の貢献の背景や内容を明確に示そうとした。

自由詩を扱う節では、自由詩の誕生という事象の全体像を把握することを目的とした。そのために、文化的素地となった定型詩の伝統や、伝統的な詩人と自由詩の詩人との間の詩論争について分析した。その結果、ケジラハビが大学教育を受け、海外の文学や文化にも触れた若い世代であったことに加え、定型詩の強固な伝統を直に受け継ぐスワヒリ人ではなかったことが、新たなジャンルの確立という貢献を可能にしたと推察することができた。一方、実際にケジラハビの詩を見てみると、自由な形式とは裏腹に、その内容は決して革新的なものばかりではなく、定型詩や口承文芸との親近性を感じさせる作品も多かった。それでも、個人の内面のみを自由な方法で綴ったいくつかの詩は、スワヒリ語文学界においてそれまで存在せず、先駆的存在としての立場は揺るがないと結論づけられた。

実験的小説を扱う節では、個別の作品における実験的な技法の使用に着目することで、作品の新たな解釈を提示することを目的とした。先行研究では、ケジラハビが実験的な技法を用いたのは1990年代初頭に刊行された『ナゴナ』*Nagona*が最初であると考えられてきたが（Gromov 2009）、1974年の小説『うぬぼれ屋』*Kichwamaji*にも、リアリズムを逸脱した構成が見られる。よって、本章では最初の節において『うぬぼれ屋』を単独で取り上げ、次の節でひとつながりの小説と考えられる『ナゴナ』と『迷宮』*Mzingile*を扱った。

『うぬぼれ屋』は先行研究において、西洋教育を受けたアフリカのエリートである主人公カジモト（Kazimoto）が、自身のコミュニティから疎外されることにより引き起こされる悲劇を描いた作品と共通して認識されてきた。しかし、本作に見られる実験的構成は、一人称の語り手でもあるカジモトの語りの内容を疑わせるという効果がある。よって本論文では、カジモトをW・ブースの著書『フィクションの修辞学』*The Rhetoric of Fiction*（1961）において提唱された語り手の種類である「信頼できない語り手」（unreliable narrator）とみなした。その結果、カジモトは疎外されたエリートではなく、エリートとして認められたいと望みつつ、実際には恥をかいてしまう哀れな人物であることが浮かび上がった。さらに、アンチヒーローであるカジモトは作者ケジラハビ自身との明確な類似が見受けられることから、当時ケジラハビが「似非インテリ」という否定的な自己認識を抱いていた可能性があることも示した。

『ナゴナ』と『迷宮』の二作品は、その形式の斬新さや難解さばかりが強調され（Khamis 2003, Rettová 2004, Gromov 2009など）、作品の意味についての議論は停滞していた。本論文ではまず、二作品の難解さがどのような要因によってもたらされているのかを特定した。そして、難解さが自己目的化している細部ではなく、物語内容の構造に着目することで、破壊と再生の繰り返しという円環が見られることを指摘した。その構造から、作品の意味を導き出すために参考にしたのが、『迷宮』で用いられる宗教学者M・エリアーデの用語である。エリアーデは、

複数の著書において破壊と再生を繰り返す円環状の時間観について論じている（Eliade 1961, 1971, 1973）。

エリアーデによると、円環状の時間においては、不可逆的で絶対的な変化は存在しない。またそのような永遠回帰の思想が説く教えとは、この世の幻想性や架空性と、この世への執着の放棄である。ケジラハビは二作品の刊行前に執筆した自身の博士論文において、エリアーデの著書を引用している。よって、ケジラハビが二作品の着想の段階でエリアーデの記述に影響を受けたと仮定すると、二作品に見られる円環構造や自己目的化した難解さは、この世の絶対性の否定、あるいはこの世の幻想性といった観念の具現化であるという結論を導き出せる。エリアーデの思想を手掛かりとすることで、二作品の新たな解釈を提起することができるのである。

「特定の社会の産物としてのケジラハビ」と題した第6章では、社会的、文化的、政治的背景との関係から作品を照射することで、ケジラハビの作家像に迫ることを目的とした。まず6.1で着目したのは、彼の作品に見られる政治性である。ケジラハビが執筆活動を開始したのは、タンザニアが独自の社会主義政策であるウジャマー政策を掲げ、新生国家の建設に勤しむ時代であった。この時代、作家たちも国威発揚のために利用され、後に「ウジャマー文学」と呼ばれることになる（Blommaert 2014）、ウジャマーの精神を国民に啓蒙するための詩や小説が多く書かれた。

社会主義時代に書かれたケジラハビの評論からは、彼も政権やウジャマー政策を擁護していたと推察できる。しかし彼の初期の小説は、ウジャマー文学とは異なり、タンザニア政治よりは男女や世代間の関係の方に焦点が当たったものだった。初期の詩には政治についての言及が見られたが、作者の政治的姿勢は巧妙に曖昧化されており、プロパガンダ詩とは趣を異にしていた。1970年代後半になると、ケジラハビの作品の政治色は強まってくるものの、初めて明確に政治を批判した戯曲『マルクスの半ズボン』*Kaptula la Marx*が出版禁止となってしまう。そして、その後に刊行された小説『蛇の脱け殻』*Gamba la Nyoka*では、作者の政治的姿勢はこれまで以上に執拗に隠蔽されていた。ケジラハビのほとんどの作品に共通して見られる曖昧な政治性について、本論文では二つの要因を提供した。社会主義時代のタンザニアにおける検閲と、「不透明性」、すなわち曖昧さこそが文学的価値を高めるというケジラハビ自身の文学観である。また、特に初期の作品においては、彼が政治的立場を決めかねていたことや、否定的な自己認識といった要因も、政治性の曖昧さに関係していたと結論付けることができた。

6.2では、ケジラハビの作品の多くに見られる猥雑性と呼び得る特徴に着目した。猥雑性とは、作品が雑多なエピソードのよせあつめという様相を呈しており、そのエピソードも男女関係のトラブルや悲劇的な出来事など、ゴシップ的な内容が多いという特徴を指す。このような特徴は一見、作品の文学的価値を下げるように思われる。しかしそれは、言葉がもっぱら声として考えられている文化、すなわち「声の文化」の思考や表現の傾向として、W・オングによって挙げられた特徴に当てはまるものであった（オング 2017）。また、オングが挙げた他の特徴のいくつかも、ケジラハビの小説の中に見い出すことができた。ケジラハビが自身の作品を意図的に「声の文化」に近づけようとしたのか、それとも口承文芸の影響が強い社会ゆえに「声の文化」の特徴がテキストに残存しているのかは定かではない。しかしオングの議論を参考にすることで、ケジラハビの作品が時に稚拙に思えるのは、ケジラハビと我々とでは文学の価値基準そのものが異なっているせいかもしれないと考えることができた。

先行研究ではケジラハビは、自由詩と実験的小説という新たなジャンルを確立させたことから、世界の文学の潮流をスワヒリ語文学界に引き入れる革新的な作家として認識されてきた。しかし以上の議論から、ケジラハビがみずからの置かれた特定の時代や社会と密接に関わり合い、そこから影響を受けていたことも詳らかになった。彼はスワヒリ語での執筆によって自身を取り巻く環境と意思疎通を図りつつ、可能な限り個人的な関心や好奇心をも形にしようとした。それゆえに彼の作品は純粋に一つのテーマを体現するのではなく、様々な要素が入り込んだ「不純」とも言うべき特徴を持つようになったと結論付けた。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（小野田　風子）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　言語文化研究科・教授	竹村　景子
	副 査　日本語日本文化教育センター・教授	五之治　昌比呂
	副 査　言語文化研究科・准教授	松本　健二
	副 査　言語文化研究科・教授	木村　茂雄
	副 査　熊本県立大学・教授	砂野　幸稔

論文審査の結果の要旨

本論文は、スワヒリ語文学の代表的な作家であるタンザニア人のユーフレイズ・ケジラハビ（Euphrase Kezilahabi, 1944-）の作家像を探求したものである。

二部構成となっており、第一部ではケジラハビの経歴や彼についての先行研究、小説と戯曲のあらすじ、彼自身の博士論文の概要など、議論の前提となる基礎的情報について、第1章から第4章までで紹介している。第二部ではケジラハビの作品研究と作家研究が展開されている。作家と作品の特性を包括的に捉えるために、主に作品の内在分析に集中した第5章と、外在要因と作品との関係性から作家像を考察する第6章から成る。

作品の内在分析を行った第5章は「スワヒリ語文学における変革者としてのケジラハビ」と題されており、ケジラハビがスワヒリ語文学の伝統や既存の文学形式に従わず、斬新で実験的な技法や形式を積極的に用いた点に着目している。スワヒリ語文学界では、ケジラハビはスワヒリ語による自由詩と実験的小説という新しいジャンルを確立させた人物として主に認知されているため、本章では、それぞれのジャンルについて1つずつ節を設け、ケジラハビがスワヒリ語文学界にもたらしたものは何かを明示することを試みている。

自由詩を扱った5.1では、スワヒリ語文学における自由詩の誕生という事象の全体像を把握することに努めている。自由詩との比較対象のために、文化的素地となった定型詩の伝統や、伝統的な詩人と自由詩の詩人との間の詩論争についての分析がなされている。その上で、ケジラハビが新たなジャンルを確立できたのは、彼が大学教育を受け、海外の文学や文化にも触れた若い世代であったことに加え、定型詩の強固な伝統を直に受け継ぐスワヒリ人ではなかったからではないかという結論を導き出した。本節ではケジラハビの詩が数篇紹介されており、非常にわかりやすい日本語に翻訳されていることから、小野田氏のスワヒリ語運用能力の高さが見て取れる。

実験的小説を扱った5.2では、個別の作品における実験的な技法の使用に着目することで、作品の新たな解釈を提示することを試みた。先行研究（Gromov 2009）では、ケジラハビが実験的な技法を用いたのは1990年代初頭に刊行された『ナゴナ』（Nagona）が最初であると考えられてきたが、1974年の小説『うぬぼれ屋』（Kichwamaji）にもリアリズムを逸脱した構成が見られることから、まずはこの『うぬぼれ屋』についての議論を展開している。複数の先行研究における共通の認識では、西洋教育を受けたアフリカ人エリートである主人公カジモト（Kazimoto）が、自身のコミュニティから疎外されることにより引き起こされる悲劇を描いた作品であるとされているが、小野田氏は、一人称の語り手カジモトによる発話の真偽が疑わしいという文体構成に注目し、カジモトを「信頼できない語り手」（unreliable narrator）とみなして分析を試みた。その結果、カジモトは疎外されたエリートではなく、エリートとして認められたいと望みつつ、実際には恥をかいてしまう哀れな人物であるという分析が可能になった。さらに、アンチヒーローであるカジモトが作者ケジラハビ自身と明確に類似した人物として描かれていることから、当時ケジラハビが「似非インテリ」という否定的な自己認識を抱いていた可能性があると結論付けている。

『ナゴナ』と『迷宮』の2作品に関しては、先行研究ではその形式の斬新さや難解さばかりが強調され

（Khamis 2003, Rettová 2004, Gromov 2009など）、作品の意味についての議論が停滞していたと指摘した上で、2作品の難解さがどのような要因によってもたらされているのかを明示している。そして、難解さが自己目的化している細部ではなく、物語内容の構造に着目することで、破壊と再生の繰り返しという円環構造が見られることを指摘している。その際に援用したのは宗教学者M・エリアーデの時間観であり、エリアーデの複数の著書（Eliade 1961, 1971, 1973）も深く読み込んだうえで、「破壊と再生を繰り返す円環状の時間観」がこれら2作品の軸になっていることを導き出している。

小野田氏は、ケジラハビ自身がこれら2作品の刊行前に執筆した博士論文を詳細に分析したうえで、彼がその博士論文でエリアーデの著書を引用していることに基づき、2作品の着想の段階でエリアーデの記述に影響を受けたと仮定した。そう仮定すれば、2作品に見られる円環構造や自己目的化した難解さは、この世の絶対性の否定、あるいはこの世の幻想性といった観念の具現化であるという結論を導き出せることから、エリアーデの思想を手掛かりとすることで、2作品の新たな解釈を提起できると結論付けている。

第6章は「特定の社会の産物としてのケジラハビ」と題し、社会的、文化的、政治的背景との関係から作品を照射することで、ケジラハビの作家像に迫ることを目的としている。6.1では、彼の作品に見られる政治性に着目している。ケジラハビが執筆活動を開始したのは、タンザニアが独自の社会主義政策であるウジャマー政策を掲げ、新生国家の建設を目指していた時代であり、後に「ウジャマー文学」と呼ばれることになる（Blommaert 2014）、ウジャマーの精神を国民に啓蒙するための詩や小説が多く書かれている。小野田氏は、この時代にケジラハビによって書かれた評論と小説および詩を比較し、評論においてはウジャマー政策が擁護されているのに対し、小説と詩においては作者の政治的姿勢が巧妙に曖昧化されていて、ウジャマー文学とは趣を異にしていたことを明らかにした。初めて明確に政治を批判した戯曲『マルクスの半ズボン』（Kaptula la Marx）が出版禁止となり、その後に刊行された小説『蛇の脱け殻』（Gamba la Nyoka）では、作者の政治的姿勢がこれまで以上に執拗に隠蔽されていると指摘し、ケジラハビのほとんどの作品に共通して見られる曖昧な政治性について、社会主義時代のタンザニアにおける検閲と、「不透明性」＝曖昧さこそが文学的価値を高めるというケジラハビ自身の文学観という二つの要因があるのではないかと結論付けている。また、特に初期の作品においては、彼が政治的立場を決めかねていたことや、否定的な自己認識といった要因も、政治性の曖昧さに関係していたと指摘している。

6.2では、ケジラハビの作品の多くに見られる猥雑性と呼び得る特徴に着目して議論を展開している。猥雑性とは、雑多なエピソード、それもゴシップ的な内容の寄せ集めという様相を呈するという特徴を指すと定義されている。小野田氏は、このような特徴によって作品の文学的価値が下げられているように思えるが、しかしそれは、言葉がもっぱら声として考えられている文化、すなわち「声の文化」の思考や表現の傾向として、W・オングによって挙げられた特徴に当てはまるものだと分析した。また、オングが挙げた他の特徴のいくつかも、ケジラハビの小説の中に見出せると指摘した。

まとめの終章においては、先行研究での一般的な認識―ケジラハビは自由詩と実験的小説という新たなジャンルを確立させた革新的な作家であり、世界の文学の潮流をスワヒリ語文学界に引き入れた作家である―について、第6章までの議論から異なる見解が導き出せるとしている。小野田氏は、作品群を網羅的に読み込むことで、ケジラハビがあくまで自らの置かれた特定の時代や社会と密接に関わり合い、そこから影響を受けていたことも明示できており、且つ、彼がスワヒリ語での執筆によって自身を取り巻く環境と意思疎通を図りつつ、可能な限り個人的な関心や好奇心をも形にしようとしたことも明らかにすることができたと言える。

援用した先行研究の概念にやや固執したことにより、偏った分析になってしまった箇所があるという指摘もできるが、それでもなお、全編を通して、膨大な資料を用いた深い考察が行われていることは間違いなく、スワヒリ語文学を専門に研究していない者をも十分に説得できる議論が展開されており、博士学位論文に値すると判断できる。日本においては、スワヒリ語文学に関する博士論文がこれまで執筆されたことはなく、また、世界的に見てもケジラハビの作家研究としてここまで包括的、網羅的に論じたものは存在していないことから、本論文は今後のケジラハビ研究に不可欠の基本参照文献となると言える。以上の点から総合的に判断して、審査委員会は全会一致で「合格」の結論に達した。